
幻艦記 欧州編

山口多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻艦記 欧州編

【Zコード】

Z0128B

【作者名】

山口多聞

【あらすじ】

昭和14年、独逸キール軍港に4隻の軍艦が入港した。物語はここから始まる。幻艦記大東亜編の姉妹シリーズです。

プロローグ（前書き）

龍嬢という表記になっていますが、変換がないためこれを代用いたします。

プロローグ

昭和14年（西暦1939年）5月、間もなく第一次大戦が始まろうとしていたその日、独逸海軍の拠点であるキール軍港に4隻の見慣れぬ艦艇が入港した。

その4隻に掲げられていたのは、赤地に鍵十字があしらわれたドイツ第三帝国海軍旗ではなく、まばゆい登る朝日を模した旗。極東の国、日本の海軍の公式旗である旭日旗であった。そしてそれを掲げている艦艇で一番大きな船は、平らな甲板を持っていた。そう、独逸にはまだ無い航空母艦であった。

この日キールに入港したのは、大日本帝国海軍の軽空母「龍嬢」、そして帝国海軍の誇る特型駆逐艦2隻に給油艦1であつた。

たつた4隻のさわやかな艦隊の入港。しかしながら、この時から歴史は大きく変わり始める。

キールに入港した龍嬢には、陸軍の97式戦闘機と、海軍の96式戦闘機が積まれていた。これらの機体は組み立ての後龍嬢から発艦し、近郊の飛行場に着陸した。この2機種の輸送は独逸への進呈と、現地で独逸の戦闘機との模擬空戦を行う事が目的であった。ちなみに、この2機種はその後のBf109との空戦で、その格闘性能をもつてBf109を翻弄し、独逸側の技術者を大いに驚かせた。また、96式戦闘機の1200kmという航続距離も驚かせた。ちなみに、日中戦争では、それでも不足であったが。しかし、このころBf109の航続距離は1000kmにも届いていないし、またヨーロッパの戦闘機で1000km飛べる機体は稀であったから、最もな話であった。

一方、龍嬢と護衛駆逐艦にはその他の物資が積まれていた。酸素魚雷、落下増槽の設計図等であった。これらの供与という大判振る舞いには、当初反対の声が大きかつたが、「独逸を見返すにはこれ以外なし。」という意見が押し切つた。この時代、独逸ではヒトラーの我が闘争の中の、日本人は2等民族という意見が蔓延していた。それに冷や水を指す。その意味も大きかつた。

キール入港3日後、沖合いで龍嬢は總統ヨツト座乗のヒトラーの謁見を受けた。彼が遙々キールにやってきたのは航空機の離着艦を見るためである。

日本側の96艦戦、99艦爆、97艦攻は見事な離着艦を披露した。加えて、99艦爆の筏を標的にしての急降下爆撃や、97艦攻の總統ヨツトを模擬目標にしての高度5m模擬雷撃等は、ヒトラー総統に「余は日本人への考え方を改めねばならぬかもしない」と言

わしめた。これは後に、ヒトラー総統が続我が闘争の中で語つている。

一方、この日龍嬢ではドイツ側が建造中のグラーフ・ツェッペリンように開発された機体の離着艦も行われた。この時の機体は戦闘機がBf109とHe112、He100で、爆撃機がBf87であつたが、Bf109は大見事に着艦に失敗した。そのため、ヒトラー総統はとなりにいた開発者のメッサーシュミット博士に「これはどういうことかな?」とにらめつけたという。また、その他の機体も急ごしらえであつたため、艦上機としては適正を欠いていた。とにかく、この時の経験から、のちに独逸では艦載用戦闘機の開発を行う事となる。

キール1939（後書き）

実際、陸上機改良であったBf109は艦載機に向かなかつたとされています。

キールでの歴史転換

離着艦テストの翌日、日本側の技術者が建造中のグラーフ・ツェッペリンを視察した。しかし、ツェッペリンに対する日本の技術者の感想は芳しいものではなかった。時代遅れの対艦用の砲、大きさに比して少ない搭載機と対空砲等、言いたい放題であった。しかし、これは仕方がなかつた。なにせドイツには空母建造の経験が全くなかつたのだから。それでも、いきなり大型空母の建造に着手するなんて、非常識と思われた。第一、艦載機のパイロットの養成さえなされていなかつたのだ。そこで、日本側の技術官は、「訓練用に商船改造の軽空母を建造した方がいいですよ。」とアドバイスした。これを受けたのかはわからないが、後日ドイツ海軍は商船改造空母のザクセン級を2隻建造している。

そして2ヶ月後、龍嬢は任務を終え、日本に帰還した。この時龍嬢は、購入したHe100やHe112、分解された四発爆撃機であるFW200等、日本がのどから手が出るほど欲しがつていた武器や軍需品を搭載していた。

この時の交流は、日独双方に多大な利益をもたらした。日本側は優秀な戦闘機と爆撃機を手に入れ、加えて最新式の工業機器も購入していた。ドイツ側は、後にバトルオブブリテンで大いに活用する落下増槽や、Jボートに搭載され活躍する酸素魚雷。それに空母の設計図（赤城級、大鷹級）や艦載機の実物も手に入れた。これが後に、歐州の歴史を大きく変えて行く事になる。そして、1939年9月。ドイツ並びにソ連がポーランドに侵攻した。第一次世界大戦の始まりである。その8ヶ月後、ドイツ空母ザクセンは竣工した。

ライン演習作戦発動

1941年 独逸

1939年に始まつた第一次世界大戦は当初ドイツ有利で進んだ。しかし、あつと言う間に歐州を席巻したドイツであつたが、1940年のバトルオブブリテンでの敗戦以降、その進撃が鈍つていた。もつとも、対峙する英國も苦しかつた。バトルオブブリテンで勝利こそしたが、その代償は大きく、實に稼働戦闘機の8割を失う大打撃を負つていた。パイロットの損失も6割強に上り、RAF（大英帝国空軍）は深刻な機体不足に陥つた。特に戦闘機の損失は痛く、植民地軍の物まで引き抜いてようやくしきぎきつたのだった。それによつて航空戦力の不足した地中海方面で苦戦を強いられることがなつた。そして、隙をついたイタリアによつて、ギリシャ等がおちてしまつた。まさに地中海方面で英國は八方塞がりであつた。

一方のドイツは、ヒトラー総統が偏食と激務で倒れたため、臨時にレーダー海軍元帥が總統に就任した。レーダー元帥はまず、ユダヤ人絶滅計画の一時凍結を命令した。そのかわりに、彼らを強制労働につかせた。彼に言わせれば、戦時下にそのような事は非効率であり、ドイツにとつて汚名となると思つたのだろう。これが彼の評判を二分することになるが。

一方、彼が手塩にかけて育て上げた海軍の状況は芳しいものではなかつた。開戦早々装甲艦のシュペーを失い、またノルウェー攻略戦でも大きな損害を受けた。もしこの時、酸素魚雷で英戦艦ウオースパイクを中破させ、駆逐艦を5隻撃沈できなかつたら、ヒトラーは海軍に不信感を持つたかもしれない。

その独逸海軍は、着々と再建を進めつつあった。すでにビスマルク級の後継のフリードリヒ・デア・グロッセ級2隻が起工しているし、空母グラーフ・ツェッペリンも竣工間近であった。

地中海では、フランスからの鹹獲艦艇を中心に、地中海艦隊が編成された。戦艦モルトケ級（元ダンケルク級）2隻に重巡1、駆逐艦8から成るそれなりに強力な艦隊であった。ちなみに、これ以外にも拿捕艦艇はあつたが、乗員不足で動かせなかつた。

そして、1941年6月、ライン演習作戦が発動された。

ライン演習作戦発動（後書き）

ノルエー攻略戦においてウォースペイトが中破したという事実はありません。念のため。

ライン演習作戦

ライン演習作戦は通商破壊と迎撃してくる英國艦隊を各個撃破する「一石二鳥」の作戦であった。

出撃した戦艦ビスマルクと重巡プリンツ・オイゲンを中心とする部隊は5月21日、英戦艦フッドとプリンス・オブ・ウェールズと会敵し、前者を撃沈し、後者を大破させた。しかし、これに対し英海軍は激怒した。フッドは国民に親しまれ、英國海軍の象徴だからだ。そして全戦力を結集してビスマルクを追跡し始めた。

一方、暗号電文の増加からそれを察知した独逸艦隊司令官リッチエンス少将は、伏兵に対し、援護を要請した。そして案の定、英海軍のソードファイツシユ雷撃機がやつて來た。当初英軍攻撃隊指揮官は、直撃機のないビスマルクへの攻撃は楽勝だと思っていた。しかし、彼らが見たのはビスマルク上空に数機の戦闘機が飛んでいる姿だった。そして10分で英軍攻撃隊は全滅した。これこそ、ドイツ空母ザクセンとナツソーの初陣であった。両艦は商船シャルンホルスト級を改造した船で、搭載機28機、最高速力25ノットの性能を有していた。

両艦はビスマルクの東200kmの位置におり、必要に応じて航空戦力の支援をする事となっていた。この時上空支援したのは、独逸海軍艦上戦闘機He112であった。

独逸空母出撃の方に最初は驚いた英海軍であつたが、しかしこの時期空母はまだ補助兵器という認識しかなく、大した脅威と認めなかつた。しかし、これが命取りとなつた。

翌日、ビスマルクを追撃していった戦艦ネルソンがJボートの魚雷を2本喰らつた。無論戦艦だから致命傷とはならなかつたが、速力が落ちた。そこへ、独逸の雷撃機、ザクセンの搭載機が襲い掛かつた。この機体は独逸海軍が日本の97艦攻を模倣した機体だつたため、

航続距離が長く、ギリギリ攻撃できたのであつた。結局、ナルソンはさらに5本の魚雷を喰らい沈没した。

航空機のみで戦艦を撃沈する事は出来なかつたが、この作戦で独逸海軍は見事2流海軍の汚名を返上したのであつた。

ライン演習作戦は大成功のうちに終わつた。

He122 ハインケル博士が日本の零戦を元にHe112を大改修した機体。

ライン演習作戦（後書き）

ザクセンとナッシュの艦隊は徳間書店の紹介の艦隊から出しました。

ライン演習作戦後、歐州において目立つた海戦は起きなかつた。しかし、そんな中で1941年10月、歐州全土に衝撃が走つた。親ソ派であつた米大統領ルーズベルトがソ連海軍に艦艇の売却を行つたのだ。ニューメキシコ級戦艦3、ペンサコラ級重巡2、オマハ級軽巡4、平甲板型駆逐艦16であつた。これらの艦艇はソ連側の乗員が約3ヶ月のアメリカでの訓練の後、次々とクロンシュタット^{クーニングラード}軍港へ回航された。

この時点でドイツはソ連と不可信条約を結んでいたので、これらの回航を指を加えて見ていくしかなかつた。しかし、ソ連が東欧開放をお題目にして独逸に宣戦布告するのは時間の問題と思われていた。

そして、1942年6月。予想通りソ連軍はポーランド分割ラインを突破。ドイツ占領地に雪崩こんだ。しかし、あらかじめ侵攻を察知していたドイツ軍は猛反撃。特に、航空戦力の優勢を武器に、ソ連軍を叩いた。また、海軍も出撃し沿岸部進行中のソ連軍を艦砲射撃した。後の戦史家はここでソ連艦隊が出てきたらと良く言うが、結局彼らは出てこなかつた。そして、8月にはドイツ軍は巻き返し、逆にソ連軍をポーランド国境に追いやつた。そしてドイツとソ連はそこで膠着状態に陥つた。

まだ本格的に英米からのレンドリースを受けていなかつたソ連、そしてアフリカ方面へ戦線を広げていたドイツ両軍に、それ以上戦う力は残つていなかつたのだ。

ソ連艦隊が本格的な活動を開始するのはこの半年後となる。ちなみに、ソ連海軍はこの頃大肅清の影響がたたつてまともな人材が払底していたから、出撃できなかつたのもうなずける。ただ、増強す

る独逸海軍の影響を受け、こちらも海軍の増強にかかっていたのも事実だ。米国からの艦艇の購入をはじめ、9000t級の軽空母レーニンや、巡洋戦艦クロンシュタット級の建造を開始していた。

戦艦ニユーメキシコ、アルハンゲリスクに改名

戦艦アイダホ ノヴォーロシスクへ改名

戦艦ミシシッピ ウラジオストックへ改名

ソ連参戦（後書き）

実際ソ連に渡されたのは英國のR級戦艦でした。それも一隻で供与ではなく貸与でした。

今回の話では学研の旭日旗往く、実業日本之社の北冥の海戦を参考にしています。

一方、アフリカ戦線では英軍の空軍不足の隙をついてロンメル将軍の装甲師団が破竹の進撃を行っていた。英軍は独地中海艦隊の攻撃でマルタ島が陥落しエジプトへの補給路が完全に遮断されてしまっていた。

そして1941年12月、ついに独逸アフリカ軍団はエルアラメインを突破、翌月にはスエズ運河を確保した。結果、地中海と紅海の制海権は完全に枢軸軍に渡ってしまった。

最終的に、3月にエジプトの英軍は降伏した。そしてエジプトには親枢軸政権が誕生し、ドイツは中東への足掛かりを掴んだ。ちなみに、イタリアのムッソリーニはエジプトの領有を主張したが、レーダー総統代理はそれを許さなかつた。現地住民の反乱を恐れたのだ。それに対し不満のムッソリーニだが、ドイツ側は資源の優先供給と捕獲した英軍艦艇の譲渡でなだめた。というよりも、イタリア側は負け続けで弱みを握られていたため、それで我慢せざるえなかつたのだ。

一方、スエズ運河の通行が可能になつたため、日本との連絡が容易になつた。6月には英東洋艦隊が日本機動部隊によるセイロン島への攻撃で壊滅したためもある。

日本がセイロン島攻略を開始したのは同月のことであつた。そして英軍はそれを予想できなかつたため、セイロン島はあつさり陥落し、インド洋は完全に枢軸軍の物となつた。しかし、最終的に独海軍がインド洋方面に進出することはなかつた。なぜならそのころには大西洋・バルト海での連合軍の活動が活発となつたからだ。

ライン演習作戦で戦艦2隻を失つた英海軍は、さらに日本の開戦で東洋に派遣した4隻の戦艦と3隻の空母、さらに地中海では独地

中海艦隊とイタリア海軍によつて3隻の戦艦と1隻の空母を失つた。しかし、英海軍はそれによつて動かなくなつたが、今度はソ連軍が動きを見せた。独逸側の数度に渡る偵察により、レーニングラード軍港のソ連艦隊や東部戦線の陸空軍に動きが見られたからだ。そして、1943年2月、ソ連軍は再び歐州になだれ込んだ。そして、それとともにソ連バルチック艦隊は出撃した。

地中海制圧（後書き）

この世界では、ドイツでヒトラーが倒れたため、ナチス党の力が弱まっています。それにより、独海軍は忠実より少ないシボートで戦っています。しかし、先に竣工した空母が代わりに通商破壊に活躍しています。また、テニツツ長官はシボートが冷遇されている分、エレクトリックボートの開発を急がせています。

感想、気付かれた事募集しています。

第一次大戦時、独海軍のリポートは一時英國を飢餓寸前にまで追い込んだ立役者であつた。それゆえ、戦後連合軍はベルサイユ条約でその保有を禁じた。

しかし、独逸側は設計等を秘密裏に外国で行つなどして研究を継続し、また乗員も対潜学校で育てるなどした。そしてヒトラーの再軍備と共に再び公に配備を開始した。リポート艦隊再建を協力に押したのが、自身もかつてリポートの艦長であったデニツツ提督であつた。しかし、彼の考えた計画は、現実には上手くいかなかつた。開戦時、実戦配備されていたリポートは大小併せて57隻であつた。しかも、沿岸用も併せてであつた。デニツツ提督はヒトラーに800隻以上の量産を進言したが、しかし戦艦や空母の整備に資材と人員を取られ、結局250隻に計画を縮小されてしまった。それに加えて、商船改造空母の予想外の活躍とナチ党政権の失脚によるデニツツ元帥の権威低下により、リポートの陰はさらに薄くなつてしまつた。

デニツツ提督はリポートの失地を回復するべく、ワルター機関搭載の新型艦の開発を急がせた。これが後に連合軍を脅かす高速艦、エレクトリックボートである。また、彼は既在艦の能力を高めるべく、新兵器の開発を急がせた。

1941年に日本からもたらされた酸素魚雷は独逸潜水艦隊でも本格採用された。取り扱いが難しく、乗員達はその搭載を嫌つたが、遠距離攻撃や軍艦、とくに船団を護衛する高速艦への攻撃で多大な功績を残した。接近する駆逐艦を酸素魚雷で撃沈し、敵から脱出し

た例も多々あつた。

連合軍が本格的に護衛戦力を揃えるようなつた1942年以降、
Uボート最大の秘密兵器となつたのが、連合軍からマウスキッドと
恐れられた直上攻撃兵器であつた。この兵器は、甲板上に設置され
たランチャーから無数の小型ロケットを垂直に発射するものであつ
た。一発あたりの威力は小さかつたが、小型艦艇にとつては恐怖の
的となつた。

もう一つ上げるとすれば、音響魚雷があるが、こちらはすぐに連
合軍が対策を打つてしまい、改良中に休戦となり、その進化を發揮
できなかつた。

後に、通信装置の改良により、水中と水上との連携が可能となる
と、Uボートと航空機またはUボートと水上艦艇が連携して船団を
攻撃するようになる。Uボートは終戦まで大いに活躍する事となる。

レポート（後書き）

マウスキッドは昭和38年に少年サンデーで連載されたサブマリン707に登場した秘密結社の潜水艦の武器です。

独逸の同盟国は軒並み、弱小国であった。特に、イタリアの弱さは世界中の軍隊が信じて疑わないものであった。ではその他の国はどうであったか。

北欧の小国であるフィンランドは戦前よりソ連との国境問題があり、冬戦争と呼ばれる戦争が起きていた。この戦争は結局フィンランドの敗北で終わつたが、損害はソ連軍の方が遥かに大きく、その精強振りを見せつけた。このフィンランド軍はその後再び侵攻してきたソ連軍との間に起きた継続戦争においては、輸入した米国製F2Aバッファロー戦闘機を中心に、フランス製のモラン戦闘機、イタリア製のファイアット戦闘機、独逸のメッサーシュミット戦闘機で編成された空軍や古くはスキー部隊、後にはドイツ製突撃砲で編成した部隊を持つ陸軍が大活躍し、最終的にソ連に奪われた領土を全て奪回している。

ルーマニアもフィンランド同様ソ連と国境を接しているが、独自で航空機生産能力を持つている国で、空軍が保有する主力戦闘機は同国製のIAR 80戦闘機で、性能こそ平凡であったが、製油所に爆撃を加える米英軍機、およびソ連軍機と戦闘を行い、輸入したメツサーシュミットやモラン戦闘機と共に多くの功績を残した。また、陸軍はフィンランドと同じくドイツ製の戦闘車両を輸入して戦つた。一方、独逸が占領したフランスでは、真っ先に独逸が海軍艦艇の接收を行つてている。この時、フランス軍の艦艇で独逸地中海艦隊が編成され、マルタ島攻略などを行つてている。これらの艦艇は1943年に一部フランス海軍に返還されたが、そのほとんどがすぐにフランス義勇艦隊所属になり、ドイツ側に参戦している。ちなみに、

この時ストラスブル級は返還されたが、代わりにリシュリー級戦艦が独逸に接收された。ただ、そのころにはヒトラー総統が逝去し、独逸は再び中道派の政府になっていたため、フランス側のサボター・ジューなども減っていた。また海軍以外にも、空軍や陸軍が義勇部隊を東部戦線に送っている。

かつて内戦の際独逸が援軍を送ったスペインは、正規の派遣軍こそ出さなかつたが、やはり義勇空軍と陸軍を独逸からの要請で東部戦線に送っている。ちなみに、その見返りとしてスペインは独逸が地中海で捕獲した英重巡ロンドン等を譲渡され、内戦の際失った海軍力を回復させた。

何かご意見有りましたら何なりと言つて下さい。

1943年2月、ソ連軍は再び歐州への侵攻を再開した。米英から多数の兵器、軍需品の供与を受け満を持しての再進撃であった。最新鋭のT34-76戦車、Yak3戦闘機やシュトルモビク襲撃機を配備し、かつ連合国からレンドリースされたバレンタイン戦車やP39戦闘機も使用していた。しかし、進撃はすぐに止まってしまう。兼ねてからソ連軍の進撃を予想していた独逸軍が準備万端にして待ち構えていたからだ。独逸軍は最新鋭のタイガー戦車やFW190戦闘機、そしてHe111爆撃機を投入していたのであった。He111爆撃機は、日本からもたらされた艦上爆撃機彗星を元に開発された機体で、初期量産型のA型は彗星そのものであったが、B型は地上攻撃用に大幅に改修され、機体が一回り大きくなり、爆装が1tまで可能となり、装備された機銃も12.7mm機銃とされた。さらに、用途によっては翼下に37mm機関砲を装備可能としていた。シユトルモビクに比べると小さいが、運動性能は良く、爆弾を切り離して37mm機関砲を装備していなければ、戦闘機とも空戦可能とまで言われた傑作機であった。

ポーランド国境やルーマニア方面から一気に進撃を開始したソ連軍は、物量を持ってがむしゃらに進んだ。しかし、ドイツやルーマニアは激しく抵抗した。ソ連の悪評は歐州全体に響いていたからだ。また、このころ独逸はナチス政権から中道派政権に移つており、独

逸兵には防衛意識が高まっていたし、ルーマニア等でも好感が高まっていた。この政権が誕生できたのも、反ナチ派の高官が陸海軍に多かったからであるが、それは別の話である。

結局、ソ連の侵攻はしばらくしてから停滞せざる得なかった。一方、海での戦いはと云つて、ソ連艦隊出港の報を偵察中のシボートから受けた独逸本国艦隊は全力を持ってこれを迎撃した。まだ竣工して間もない FDG を旗艦に、戦艦 3、巡洋戦艦 2、重巡 6 隻であった。ちなみに、この時独逸海軍は艦隊用空母 2、商船改造空母 4 隻を保有していたが、いずれも北海での通商破壊任務やドッグ入りしていたため、この海戦には参加しなかった。

両艦隊はダンチヒ沖で会敵、そして距離 2 万 m になつたところで、まずソ連艦隊が発砲した。後にダンチヒ沖海戦と呼ばれる、独ソ唯一の大型艦同士の海戦の始まりであった。

ソ連再侵攻（後書き）

FDGとはフリードリヒ・テア・グロッセのことです。

ソ連海軍は日露戦争での敗北に加えて、革命によつて潰れたも当然だつた。なにせ、当時の皇室ロシア海軍の士官は皆貴族出身であつた。つまり、革命での排斥対象であつた。つまり、人事面で大きな痛手を負つてしまつたのだ。また、艦艇も多くを失い、残つた艦も半ば放置されてしまつた。

その後、1930年代に入り、艦艇の新造や改装などを行い組織の復旧に努めたが、ここで再びスターリンの大肅清が起こつてしまい、多くの人材を失つてしまつた。特に、8人の提督全てを失つたのは痛かつた。その後も、戦力の回復を図つたが、陸軍や空軍の戦力整備に力が注がれてしまい、海軍の復興は思うよつに行かなかつた。

そんな状況が一変したのは、独逸の海軍力の増強であつた。特に独逸が新型の戦艦や空母を配備したのは脅威であつた。バレンツ海はいざ知らず、レニングラードのあるバルト海側からの侵攻やバルト海の封鎖が現実の物となつたのだ。

そこで、ようやくスターリンも海軍の増強を決めた。新造艦の建造だけでは間に合わないため、急遽同盟関係にあつたアメリカから艦艇を買い取つた。この時、スターリンは空母の購入も望んだが、アメリカ海軍でも不足していたため、この話は流れてしまつた。また、新造艦の建造も技術力不足がたたつて、当初より大幅な計画縮小を余儀なくされた。

それでも、1943年初頭において、ドイツとの正面対決をするであろうバルチック艦隊は戦艦4、重巡4、軽巡3、駆逐艦15とまがりなりにも数を揃えた。また、約1年近い間訓練を行つたため、

練度もそれなりに高くなっていた。

ダンチヒ海戦時のバルチック艦隊司令長官のルイチエンコ中将は、一年前まで重巡カリーニンの艦長であったが、2階級特進の上司令に抜擢されていた。後に、ロシアの「ミッソ」と呼ばれる男で、その采配は冷静沈着で粘り強かつた。また理論家でもあり、その後の軍法会議で見事無罪を勝ち取ることとなる。

そのルイチエンコ中将指揮のバルチック艦隊は、独逸艦隊に対し、砲門数での有利を生かして戦いに望んだ。

ソ連海軍事情（後書き）

実際のソ連海軍がどこまで訓練をできたかは微妙です。ソ連ではスターリンによる独裁や政治将校の存在という大きな問題がありました。

感想などお待ちしています。

ダンチヒ沖海戦（前書き）

艦隊の編成については後日アップします。

ダンチヒ沖海戦

ダンチヒ沖海戦は、ソ連海軍の初弾発砲から始まつた。距離は2万5千m。しかし、やはり長距離砲戦をするには乗員の練度不足であつたのか、独逸艦隊が初弾を発砲するまでに、有効弾を与える事は出来なかつた。

独逸艦隊の発砲開始は距離2万mであつた。FDGの砲弾は口径40・6cmであつたので、その水柱は、それまで36cm砲弾の水柱しか見たことなかつたソ連海軍水兵たちを恐れさせた。しかし、FDGの砲弾は近弾にはなつても命中弾は中々得られなかつた。やはり竣工から2ヶ月しかたつていなかつたため、乗員の練度が不足していたのだ。結局彼女がこの海戦で得た有効弾は2発のみで、戦果は戦艦ノヴォーロシスクを中破させただけであつた。

一方のソ連海軍は遠距離砲戦こそダメだつたが、近距離砲戦ではかなりの有効弾を得た。ただ、独逸側もFDGを除けば歴戦艦であつたため、ほぼ殴り合いの結果となつた。まず最初にソ連側の戦艦マラートがビスマルクの38cm砲弾をくらい大破後自沈した。かと思えば、独逸の装甲艦（ポケット戦艦）リュツツオウがウラジオストックの36cm砲弾の直撃により魚雷が誘爆し轟沈した。

小艦艇同士の戦いは、酸素魚雷と電子兵器を載せた独逸側の有利に終わり、ソ連側は重巡1、軽巡1、駆逐艦5隻を失つた。対する独逸艦隊は軽巡と駆逐艦をそれぞれ1隻ずつ失つただけであつた。

最終的に、海戦の結果はほぼ痛みわけに終わり、独ソ両艦隊はお互い主力艦を沈めぬまま弾薬を使いきり、海戦は終わつた。最終的に独逸艦隊は喪失は前述の3隻のみであつた。対するソ連は前述の8隻で、沈めた数では独逸の勝利で終わつた。

戦術的には独逸の勝利であつたが、戦略的には痛みわけであつた。この海戦で主力艦のほとんどが損傷し、ドック入りが必要になつたため、得意の水上艦による通商破壊がしばらく行えなくなり、おまけにソ連に対する海軍優位が一時的とはいえ崩れてしまった。それは、独逸にとっては無視できぬ事であつた。

これが評価され、ルイチエンコ中将は後に敗戦の責任追及の裁判

で無罪を勝ち取つてゐる。

ダンチヒ沖海戦（後書き）

ソ連艦隊司令、ルイチエンコ少将の名は、実業之日本社発行の群青の航跡から貢っています。

イタリア脱退

1943年6月

この月、世界に激震が走った。枢軸国的主要国であつたイタリアが、三国同盟から脱退、局外中立を宣言したのだ。

既にエチオピア侵略から長年戦争を続けていたため、イタリアにはもはや戦う力は残されていなかつたのだ。というよりも、犠牲に比べ戦果の少ない戦争に、国民のムッソリーニへの不信感が爆発した結果であつた。

この瞬間、ファシスト政権は崩壊し、バドリオ新内閣が発足した。ただ、この政権は中々強かであつた。

彼らが恐れたのは独逸が裏切りとして報復攻撃を仕掛けてくることであつた。それがないよう、まず彼らが行つたのは、イタリアに譲渡されたイギリスからの捕獲戦艦を2隻とも独逸に返上する事であつた。もちろん、局外中立であるから、直接枢軸国に兵器は渡せない。ただし、ここは巧妙であつた。実は、新イタリア政府は、クーデター発表から局外中立発行までに一ヶ月の時間を設けたのだ。この間は、独逸への武器の輸出が国際法的にも認められる。この一ヶ月の間に、2隻の戦艦や航空機600機等が独逸に引き渡されてゐる。

とにかく、こつして独逸の機嫌をとつたのであつた。

また、もう一つの同盟国であった日本に対しては、少数の航空機を引き渡したいがいは特に何もしていない。ただ、日本の同盟国で

あり、かねてから軍艦の発注があつたタイ王国へは以前に引き渡したタクシン級軽巡2隻に続いて、さらに2隻の重巡と軽巡に4隻の駆逐艦、6隻の潜水艦。その他の艦艇3隻を引き渡している。

その他枢軸国。インドネシアやインド、満州国へも艦艇や航空機を引き渡している。

イタリアの枢軸脱退は、どちらかといつと独逸では、弱いイタリアが抜けたという考えが強かつたので、特に何も起きなかつた。距離が遠い日本でも同じであつた。むしろ連合国を怒らせた。米軍はイタリアからの上陸を考えていたのである。それが潰えてしまったのだ。

こうして、地中海方面からの連合国の反抗は事実上不可能となつたのであつた。

独逸海軍の大規模な建艦計画変更は、英國海軍に大きな衝撃を与えた。特に、独逸が通商破壊戦に空母を投入し、反比例するようにシボートの活動が予想より低調だったのはありえないことであった。このため、護衛艦の建造計画が大きく削減される事となつた。また、建造される護衛艦も対潜兵装を減らし、対空兵装を大幅に強化することとなつた。

独逸が通称破壊戦に空母を投入した始めたのは、まやかし戦争が終わり、独逸がフランスへ侵攻した直後からであつた。この時期、船団の護衛艦の対空兵装は不十分で、また護衛空母もなかつたため、独逸海軍空母部隊は実に半年近く、大西洋や北海を縦横無尽に暴れまわつた。それによつて、実に80万t近い連合国艦船が犠牲となつた。

その後、英海軍が正規空母を投入し船団護衛に投入したため、独逸空母の活動は一時低迷した。しかし、地中海方面での独逸海軍の活動が活発化し、英海軍の戦力が大西洋から引き抜かれ、さらに独逸が艦載機に新型の Fw 190 戦闘機や He 111 爆撃機を投入すると、再び独逸海軍の空母の活動が活発化した。日本海軍の機体を模範とし、航続距離が長い独逸機は船団にとつて疫病神であつた。英海軍が独逸機動部隊に対して不利だつたのは艦載機の能力が大幅に劣つていたことにあつた。また、空母の建造が追いついていなことも原因であつた。また、支援を期待した米大西洋艦隊が、太平洋に戦力を取られ活動を制限されたのも大きな打撃であつた。

英海軍は1942年、相次ぐ戦艦や空母の消耗に対して、戦艦ヴ

アンガードの竣工を急がせ、さうにコロッサス級軽空母や護衛空母の整備も急いだ。だが、結局終戦までにこれらの計画で実を結んだ物はごく僅かであった。

追記

ダンチヒ沖海戦ソ連艦隊編成表

戦艦ノヴォーロシスク級3隻、マラート級2隻、重巡4、軽巡3、駆逐艦14
司令官ルイ・エ・ノ・コ・海軍中将
旗艦戦艦ノヴォーロシスク

同独逸艦隊編成表

戦艦フリードリヒ・デア・グロッセ級1隻、ビスマルク級2隻、シヤルンホルスト級2隻
大巡2隻、重巡3隻、軽巡4隻、駆逐艦12隻
司令官クラウス・海軍大将
旗艦フリードリヒ・デア・グロッセ

大西洋戦争（後書き）

この世界においては、独逸は1943年時点で艦隊用空母2、商船改造小型空母5隻（内一隻は練習空母）を保有しています。

1944年6月に入ると、英國では國民の間に獻戦感情が高まりつつ、エジプト、インドを失い、さらに独空軍の四発爆撃機、He 277の本土爆撃にさらされていたからだ。おまけに、海の守りもかつて七つの海を支配したロイヤルネービーの東洋艦隊、地中海艦隊は既に無く、残る本国艦隊も僅かに戦艦5、空母4隻しか主力艦は残されていなかつた。ジボート対策に作られた護衛空母や護衛艦も、最新鋭のエレクトリックボートと音響探知魚雷を装備した独逸潜水艦隊により撃沈される船が相次いでいた。

英國にとって、頼みの綱は同盟国であるアメリカとソ連であつた。しかし、アメリカは陸軍航空隊を英本土に派遣するのが精一杯で、とても陸上兵力や艦艇を大西洋方面には回せなかつた。またソ連も、英米から物資輸送が通商破壊戦によつて滞つてゐるため、ヨーロッパ方面への侵攻は下火になつてゐた。

一方、対戦相手の独逸でも、ナチス党が倒れ、アウデナー政権に移行した今、英米と戦う必用はなくなつてゐた。それよりも、未だ欧洲への野望を捨てぬソ連との戦いに集中したいのが本音であつた。英独の和平交渉が水面下で始まつてゐた。しかし、当たり前だが、自國有利の条件にしたいのが人というもの。独逸としては、エジプトやイランを始めとする各占領地の独立国家を承認し、さらに拡張した軍備を認めるようせまつた。対しイギリスは占領地の返還と、ジボートの大幅削減に空母の廃棄を迫つた。結局、両者とも妥協点を見出せなかつた。

そして、両国は交渉を有利に進めるため、最終手段に出た。それはもてる海軍力を総動員し、相手国の残存海軍兵力を駆逐、殲滅するというものであつた。

その結果起こつたのが、後に陸軍国家独逸最後の戦いといわれた
北海大海戦であつた。

独逸海軍は本国艦隊にあつた、戦艦4、巡洋戦艦2、大小含めた
空母6隻で編成した、新外洋艦隊を出撃させ、イギリスは残存する
本国艦隊の全てでこれに挑んだ。

北海大海戦 上（後書き）

予定では後2・3話で終わります。今しばらくお付き合い願います。

北海海戦は、両軍とも艦載の偵察機での索敵から始まった。しかし、英海軍はここから大きくつまずく事になる。

この時、独海軍は空母搭載のHe111とともに、水上機による偵察も行った。この時使ったのは、日本の零式水偵をモデルにアラド社が設計・開発したAr200水上機であった。この機体は零式讓りの長い航続距離と、独逸機特有の堅実な設計が融合した優れた機体であった。

対し、英軍が使ったのはTBFアベンジャーであった。この機体は米国製の雷撃機で、機体自体は英國製の雷撃機より勝っていた。しかし、この機体を出したがため、英軍は大きく苦戦する。

最初に敵を発見したのは英軍であった。直ぐに、英空母から攻撃隊が発艦した。しかし、問題が発生した。

この時、英空母はかなりごちゃ混ぜな機体を使っていた。英國製のシーファイア、ソードフィッシュ、米国製のコルセア、ドーン・トレス、アベンジャーと性能にばらつきのある機体であった。この内、シーファイアは航続距離が極端に短いため、艦隊護衛用にしか使えない。攻撃隊はその他の機種で編成され出撃した。しかし、ただでさえ、少ない艦載機にシーファイアを混ぜたため、その他の機体の合計は総計して150機であった。この内、30機近いアベンジャーが偵察で引き抜かれているため、さらに少ない数となつた。

英攻撃隊は最初アメリカ製の機体が中心となつて独艦隊を攻撃した。しかし、レーダーでかなり手前で探知され、最新のFW190

Dの邀撃を受け、ここで4分の3が脱落し、残った機体も対空砲火で大きな損害を負った。対し、独逸側の被害は駆逐艦1大破のみであった。ただし、おつとり刀でやってきたソードフィッシュによってさらに駆逐艦1が失われたのは、英攻撃隊の奮闘を示している。

北海大海戦 航空戦上（後書き）

次回は独逸サイドです。

一方、独逸機動部隊も航空機を発進させ、英艦隊への攻撃をかけていた。既に、水偵で英艦隊の位置を掴んでいた独逸攻撃隊は、約120機の集中攻撃で英艦隊に挑んだ。

戦闘はまず、英艦隊のシーファイアード、攻撃隊護衛のFW190Dとの空中戦から始まつた。シーファイアードは約60機、しかしFW190Dは約50機。やや英軍有利であつた。しかし、それは悪魔で数だけの事。最終的に、開戦以来の優秀なパイロットを集め挑んだ独逸側にその差は埋められ、戦闘機同士の戦いは互角であつた。そして、最終的に戦闘機隊は突破口を開けることに成功した。

英艦隊に独攻撃隊が襲い掛かつた。

英艦隊は対空砲火を張つたが、この時はまだVT信管は出来ておらず、さらに独攻撃機はいずれも速度が英軍機より速かつたため、英軍の兵士達を惑わし、有効な対空砲火を妨害した。

防空陣形を突破した独軍機は戦艦には目もくれず、4隻の空母に襲い掛けた。

独逸海軍のHe111爆撃機は、空軍との共用機で、1t徹甲爆弾を装備可能であった。その1t爆弾を次々と英空母に叩きつけた。重装甲で知られる英空母の装甲といえど、さすがにそのような大型爆弾に耐えるはずがなく、次々と火災を起こし、航行不能に陥つた。

さらに、今度はF1194雷撃機が襲い掛けた。この機体は、日本の天山雷撃機のライセンス版で、独逸版はエンジン変更により、速度が上がり、装甲と武装が強化されていた。

雷撃隊は、駆逐艦と巡洋艦をターゲットにした。英艦は必死に回避運動を行つたが、全てを回避する事は出来なかつた。結果、駆逐

艦2隻が轟沈、1隻が大破後自沈。巡洋艦2隻が大破し、内1隻は後沈没した。

結局、海戦第一幕といえる航空機同士の戦いは、空母3隻、巡洋艦1隻、駆逐艦3隻を撃沈した独逸側に軍配が上がった。

航空機の傘を失った英艦隊は一時ここで撤退も考えたが、間もなく日暮れを迎えようとしていたため、レーダーを使用しての夜間砲戦に持ち込むことにした。

航空戦が終わり、損傷艦艇を離脱させると、独英両艦隊は夜間砲戦を行うべく、お互いを求めて前進した。

お互いの距離が100kmに達した時、両艦隊のピケット艦のレーダーが敵を探知した。英艦隊では直ちに砲戦準備がなされ、総員が戦闘配置に着いた。

一方、独逸艦隊でもそれは同じであったが、一つだけ違う事があった。戦艦と巡洋艦がそれぞれ水上機を射出させたのだ。

英艦隊はこれを弾着観測機の発進と確信して、自身の勝利を疑いのない物とした。

距離は30kmまでつまつた。しかし、その直後レーダーが真っ白と成った。実は、水上機はアルミチャフをまき、レーダーを妨害したのだ。これによつて、レーダー射撃は不可能になつた。

さらにそこへ、水偵から照明弾が投弾される。

独逸艦隊は、レーダー射撃ではなく、背景照射のもとでの砲撃戦で挑んだ。これは、独逸艦隊司令のクラウス大将がが日本からもたらされた第一次ソロモン海海戦の教訓をもとにした戦術を行つたからだ。

距離2万m、まず独逸艦隊が発砲した。FDG級2隻による射撃は、恐ろしく正確であつた。

一方、英艦隊も混乱から立ち直り、独逸艦隊から遅れること20秒、射撃を開始した。しかし、そこで独逸艦隊が意外な行動に出た。一斉に右回答したのだ。当初、英艦隊司令部はこの行動の意味がわからなかつた。しかし、しばらくして気づいた。これはかの東郷提督が行つた敵前大回頭だと。

直ぐに、英艦隊は反対方向への回頭を図つた。しかし、不幸だつたのは、この瞬間にFDGが被弾してしまつたのである。幸い幕僚は無事だつたが、無線アンテナを叩き折られ、通信機能が一時麻痺

してしまった。

この間に、独逸艦隊は回答を終え、英艦隊への集中射撃を開始した。たちまち、KGVは5発の命中弾を浴びた。また、2番艦のデューク・オブ・ヨークもビスマルク級2隻の集中射を受け、1・2番砲塔が全壊した。

戦闘は独軍有利で進んだ。戦闘開始20分。KGVは大破戦列離脱。2番艦DOYは航行不能。3番艦アンソンも炎上。誰もが独海軍の一方的勝利を確信した。

しかし、そのとき、独逸戦艦ビスマルクが大爆発した。

ビスマルクに痛打を与えたのは、ロドネーであつた。彼女は速力が遅かつたため、艦隊の最後尾にいた。それが幸いし、この時点でロドネーは大した打撃を負つていなかつた。

ビスマルクはヨーロッパ最強の戦艦とうたわれたが、実際は第一次大戦中のバイエルン級戦艦の設計を流用していた。だから、この時代の大和やアイオワに比べると、決して最新鋭の戦艦とは言えなかつた。一応防御装甲は改良されていたが、それでも、一部で設計の古さがあるのは咎めれない。

ロドネーの射撃で、ビスマルクは3基の砲塔が使用不能に陥り、速力もガクンと落ちた。炎上する彼女は格好の的となり、短時間に40cm砲弾7発、36cm砲弾3発を喰らつた。さらに、突入してきた英巡洋艦の20cm砲弾5発も喰らつた。

英艦隊はここで一気に独逸艦隊に大打撃をくらわせた。

しかし、独逸のお返しは猛烈だつた。特に、ビスマルクに打撃を与えたロドネーは集中砲火を受け、40cm砲弾12発、38cm砲弾5発、28cm砲弾7発を喰らつた。そして、その内3発程度が装甲を貫通し、弾火薬庫で炸裂した。

大英帝国が開戦以前に建造した最後の戦艦はこうして北海深く沈んだ。

ロドネーの沈没により、ほぼ海戦の趨勢は決まつたも同然だつた。独逸側は未だ5隻の戦艦が戦闘可能にあつたのに対し、イギリス側は2隻にまで減つていた。

結局、英海軍はその高速を利して、撤退を開始した。独逸側は深追いはせず、沈没艦の乗員救助に全力を尽くした。

海戦は英艦隊が撤退した2時間後、大破漂流していたビスマルク

が駆逐艦の魚雷により自沈処分された瞬間に終わった物とされた。
この海戦で、独海軍はビスマルクに加え、巡洋艦2、駆逐艦5隻
を撃沈されたが、英海軍の損害はそれをはるかに上回り、戦艦3、
空母3、巡洋艦6、駆逐艦8隻を失い、事実上壊滅した。この海戦
により、独逸はWW1の雪辱を完全に晴らした。そして、講和会議
は独逸有利の形で進められる事となつた。

次回、いよいよ最終話です。

エピローグ 休戦

独逸と連合国との間の休戦講和は仏蘭西のブレストで行われた。交渉は難航したが、独逸は北海海戦での勝利や、リボートの通商破壊戦による優勢をフルに使って会議をリードした。

結局英國はエジプトの独立を認め、フランスはドイツへの領土割譲を容認した。アメリカはソ連への支援を中止し、これらを全て容認する事となつた。ちなみに、連合国は軍縮条約を提案したが、ドイツがソ連との戦争を継続したため、このベルリン軍縮会議は戦後の1947年に行われることとなる。

一方の独逸は各占領国の亡命政府を認めた。これらは帰国後独逸の傀儡政権と選挙で戦う事となる。

独逸はこの戦争の間にかつての栄光を取り戻し、さらに強大化したナチスをヒトラーの死により駆逐しきれ、かつ国内の経済を完全に復興した。

こうして、独逸と連合国との戦闘は終わつた。しかし、連合国は日本やアジア諸国との、またドイツはソ連との戦争が残つていた。フィンランドやルーマニアでは未だに熾烈な戦いが続いていた。独逸はこれらの国々と協力し、ソ連を撃退せねばならなかつた。ちなみに、1945年に入ると、連合各國も反ソ連合を組み、旧枢軸の独逸を始めとする国々を支援している。ちなみに、独ソとの間の戦争は歐州大戦と呼ばれ、最終的にソ連が独逸の戦略爆撃で国内が荒廃し、スターリンが暗殺される1945年9月まで続いた。

大戦こそ終わつたが、世界はまだ戦火を残していた。

時に、1944年9月のことであった。

ハローク 休戦（後書き）

ここまで付き合つていただきありがとうございました。しかし、大東亜編はまだまだ続きます。どうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0128b/>

幻艦記 欧州編

2011年6月8日13時48分発行